



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

御書也

卷之三

月日一 桃乃魚二種弓
乃也ノカヤリモ
那ヨハム月魚一月乃魚
ウミツブ乃魚トロ今一比
カヨ袖乃魚トロモウタ
被ヨイシヒシテモウモウセ
ミルカモウツブトロモウタ
日魚ノシラモウタヨ
て年ヨアシラモウタヨ
懷孕トモウタモウタヨ
久々秋田育魚二わ
ト乃ウタれヨハリモ

56-4081

おもむきよ極乃あうる
うう今一加くとことわを

金

様只一ゆら一非の數より
様とと一うまく様様を
数ひく様もと申す申す
ひよこの申人まふ様眼あの
みの様もと様もと申けり
様嚮ぬるの申けり
様汲乃池人まふ様と
と一あらじ度申の様り一あ
ちもそれも申けりえさう
あやま瀆よとあそて難どあ
乃内うわ生敷ノへわ

と

ましよつひくと下と
まくまくまくまくまくまく
もとまくまくまくまくまく
わをうつて離はつて金を
まくまくニねまく补まくまと
のるかくとこそほまくへまく
まく離はまくまくまくまく
もと離はまくまくまくまく
魚ふくはまくまくまくまく
座一かられとも離はまくはまく
寂莫用寂うくまくはまく
おもむくまくまくまく

と一お構へあるまようわ
のりもほきくとくらむわ
すゑひとくらむわ
もぬうすにわゆ地もひ神さ
ひのかよすあらへどもれも
基俊のあよましも
ふもとゆきもれももと
や乃山田鶴
はまくよあとせまつり
とゑとねわとおりてま
ひわとめりてま
まをまくよあとせまつり
とゑとねわとおりてま
ひわとめりてま
とれもあ合ふとめりてわ
と後成といふれぬも
とれもあ合ふとめりてわ

かくふへんあらひを元ま
かへ今來とるゝあら修道
もぐり次の方力水乃えひ
さひ勧るる名別乃むれ
え付もくひ
猿只一毛猿山猿
紅葉よ一毛猿山猿
て只猿と二ありもじし
一毛猿山猿
あらひを元ま

此爲毛之性也。毛爲主。而爲之者。則爲之主。故曰。毛爲主。而爲之者。則爲之主。

大猿のすもくらまくさ
みゆりん大猿のくぬと
乃猿乃駒の小馬の通了り
得うえふるうり後物の
あよ山猿よ馬をそりがつ
た猿也とおれり人すじ
せびあまくと拂をふへあまく
あへくれは塵モミあよ経よすまく
ねうれい拂云は放角

猿人 猿圓すの種物新或め
い猿人を調物の名し
通く新云の名のとくう
と云のちり紙もねだ繪にあら
まほ小紙く種紙かあら
きか紙もとじ猿人猿圓と種
紙りと毛ちうの細ありと毛

不審うりた拂よへを分う
シテ一毛うり紙よへ種紙う
ニウとあまく既よ新或よ
種紙やうと化さうよへ余の
催馬ふとううりく種紙う
三毛うも放へよしきう紙
ひひきの名よ爲ゑとく
人倫よあくすとううり新或
乃種紙うりとえをかとハ人倫
小も種へよしひ猿人猿圓よ付
てへ種くの云とるまくもりき
と対よのとく

猿圓 まくもと種紙うり

猿圓 実もと

猿圓 猿圓と種紙うり

猿圓 猿圓と種紙うり

えの名前も難い極も

え

橋戸 まよ 極也し極も

橋頭 まよ 極乃ひあらふたりと
の役り橋見も圓あ

橋麻 まよ えこきくほあらう
極也よわくは難うり

橋の船 まよ 難もり極也よわく

橋豆 まよ 人ぬし難をりも橋川

かわ極也よわく

橋川 まよ 難しき也をりも

橋ノ まよ 極也よわく

橋豆 まよ 人ぬし難をりも橋川

極也よわく人名も名字も

河も水邊よわくは圓云橋町

橋乃も湯も極也よわく

て橋川橋豆と極也イ不盡

といひゆる若云橋町ちねや

名也よわく次平也よわく

あらあら橋とぬく極も

被くら中納みのりもます

名前のみよわくあり橋

乃も佛も天心乃跡がくよ

往也云馬橋とも云ひ一也よ

橋を極す角の河ものなま

まく死のるも河の下に

とつて名也よわく

う様むもそくううふみから二
うともうまうまれるより様月
きの法をもちとて居ておそれ
ひが圓ゆふくせうるまを
不氣風を祀るやううるあす
残ぬれり様井田あす向様
乃きもめん若もしハ蟹廟の
宗祇乃君と宮く様りとい
獨ううゆどあると居ま
詔本をわざりく内殿御下
か殿前よ四條河

様かまのまき

寒、さしきゆつも圓陣
さしきとさのと云もく
あわり色のゆくし形り

ひかよんと被りゆく今
一ありあられもあよもしま
さゆううんとゆと云こもじま
さゆううんびとのねいひぐ
あゆも圓まち圓わゆる
色くゆつひう色ぬき地
乃きよ裏よあるたゞへ
美きじよと云のあるお裏
よハ美乃きゆうたまゆく直
不可有れきのそゆあゆも
可育くんのそゆあゆもゆ
えくゆ裏りへ化乃きよ
ももじよと云す有り
えくゆ又表りんゆくわく
えくゆじよと云の裏よ
そのさゆううんのうらあく

教は傳くも因まひる
アミと通じのまゆり船先
月乃きゆる衣のまく角うま
クルムシのむかひりもす成
スルもしまと云ふよる連
乃あくわとぬくさゆうと
三翁もんと教は傳くも
因あらひうじきくさゆう
くくくんく三タムアリ向
わよいわく次もじむき物
ん省ますと人面をもぐ
ありとぞ一而とくも
因まひるく汝ゆ
さゆく多よ一地乃まよ一
と室く連アニカア
キモ拂アヘニカアリヒ
さむく多事成角
さむく多事成角
あやめん乃まゆうなり
とも三カ乃門成角アラ
の稀よあつ文字を月先
白きとよこ交織へまゝ合
やあくをま取角
さむく多事成角
さむく多事成角
あやめん乃まゆうなり
とも三カ乃門成角アラ
の稀よあつ文字を月先
白きとよこ交織へまゝ合
やあくをま取角
さむく多事成角
さむく多事成角
ナツカセテ扇面圓玉清
と清く象よのまじひゆ
ひめくま酒をあくひゆ
次よあくひゆ
燐も肌うつさゆう日さ
唇あく燐うやうのま
さむく多事成角
歌を燐角アヒテラホニヤ

新式乃旨と見ることひて
新式以降乃連漸のきを
有りしれりと業者わ乃
家乃孰乃あくまうおうと云
泊乃トよろしくほえ
藤乃庵 極稀よあくまう
居也

され 極稀うらもふうり
旅リ あくま

さくめ 藤乃家よこち

藤とあら 新式くのことく

漸うハセウミムコトモ

用ゆ山伏乃袈裟

とく行けも藤乃家よこち
あくまくひ三タヌ因神是念
やう行とみぬるれも漸
スハニタキシ度ニトキ行
き行るとあくまく行よる
まへ一圓云くものと
つはよ行向あらへさるや
着云新式よいと同云く
さけきちあめとまと同
面と極と哉あれもさうえ
あのもわよ一けゆう物と見え
ありあくまく漸よんあ
あるのきのひ度ハセウ
まふとく年よ五
わうれも漸うももとと一

ものゝをのぶ 狂歌乃乃乃
えりをあとひくをもる
まへむれもしももとあめ
あめらせらもへへひそゑ
織りへあつもまつてゐる

卷之三

そぞり 薙よひ二わ爐あるのそ
竹よひさへひあ
非禮也とぞとく身骨也のき
ひりくのれをあ
れの林ぬよひるはゆもと
そぞりそく今一あそわ
ももそよ二わ丁爐ある
もも竹よひさへひ
世作の庭されと竹わいそ
うひるまく

催馬織出の草木

相^シれぬ其事^ハおほき
事^ハあつこひにあつて柳^シ
も柳^シうれし乃^ハ秋^シ
よもじも極^シむよへりく
冥^シ思^シ冥^シ獨^シ人^ハ
人^ハ多^シ人^ハ傷^シよ
人^ハ多^シ人^ハ催^シ

馬糸より引くす一切の糸網
乃名のちよみの種類よハア
次も成しゆる 當るる規
乃猿鳥生類よハア 次回も
多生類よハア 次回も
乃猿鳥生類皆多成へれ
雖と儀馬糸の併勢也ハ
雖波津のふゆきよハア
欲者多新或よ多本の事と
もねく種類よハア
鈴より多本の事と
もとち併勢の事とあり
をあはよハ取れうすと
かゝりてとくわたり
船ふもさく生類ふもさ
と多くりもあひ一物乃神糸
皆多の事とくわたり
及神糸も多本もあくす
もえしあはゆも下にせ
船合乃くらやう漁の事
乃やくうれを新或不^レ只
大網をうりく網目をもろ
まくま竹内家通多事
かくは毛船よ海とくわよ
きのこ

佐保船の衣

非衣新或

衣類よあくさく角
よさく船と多本よく
とくはと多本よく
とも雖乃漁業もろんより
まく四舍ともそれりよ

かくアラムキを取る
ふもと處より取るとうき
ありも縛事す取るとうき
名跡非名ふと云義理を
のきぬあくと云新紙よ
とわくと云善日れ紙
経若乃紙のとと経巴の時よ
と名あよやくあくとわく
と之の僻地がま跡ちんのひ
紙もと取るくいはくと
現り後も効精紙
新紙より開くよ紙あき
ありと紙と只紙のひ名よ
てとてゆき名紙二枚あるよ
ゆく宣らお同じ紙也のや
き紙、新紙、あくと
経若の紙乃は名のうへ
と中はとと應げとと
き事取紙と推量せ
ありそれへ名あくとと
全く敷ひきよとと
新紙よ新紙非名ふと
唐よハ風化乃紙と名
美紙乃紙ひ葉とねりあ
は紙とあくを日むよへま
乃風化の紙ととくひめと
りひ紙乃紙とひと風化とと
うち作保紙と名うり

あくまの鷺さけりきとも娘と
えりや鷺のわるくふらと
れづくねとへうすも遠丸
安所さかよ夜鼓よそき
もぬれをうんそ名不^ト
きぬをふやれり思はるよ
え保とねる者あわん
んち空く、後生よ知る
よとそろひゆき佑保と
ちと佑保の山根とくみを
西経とくんちくあくま
神とさりとみたと氣ふく
え口傳ふよもむく
さわ 小猿のか字付包と
きぬや紙不^シ書く

さわ 連よみ白拂よ三弓
をとく匂あと
クハ男の字と見てよとたま不
堪きくも男鹿うりきの
字と小乃字うれをのまへ
小のまよあく

鷺 非水毛と離て跡るる
白鷺と殺す後くえり
角と和あよあくもとよも
もゆるれとわとちくと
あく一郎とくもとま
金とあよおみうれを白毛
字よせらち今まくもとま
ス佐治もあくもとまを
可去かくもとまへ鳥のゆ
まくもとま可去地原

印の字あひのまことあひとまこと
とかくよとまことあひとまこと
可依弓神たり

画乃ひわと月と

よ二句可依弓神とあひとまこと
望新月もあひとまこと月と
おも事もとまこと月とニ弓と
酒と弓と

坂乃門より

坂二今一弓不よりとまち
非山教名別の相とれを

付くもとまちとまちとまちと
坂山教りとまちとまちと
とまちとまちとまちとまちと
乃もの坂と山教し非山教
とまちとまちとまちとまちと
とまちとまちとまちとまちと

迷懷小あく次とくとも坂
三乃内、三義の坂図ある義乃
多とね、

揚乃宮風乃え修造の末祐
きも本草のむ乃ふをもく
あう事と正もよハニカミヘ
和と花の咲く門戸とひら
くわとの用の字ハニカミ
きもひものひくと云時ハ敷の
字咲乃字用の字たとと云
かくものひくと云時ハ門
戸林文お乃用と云面とゆく支
欵ひくと云詞むれされハ

釣或よひうらと称せられ一
りてあるくま河ととがもゆ

を

又苗 わくび

津 只一名水より一逃は汎二名
而よりひとと山汎すと教
ふ傳くもこの内こ又汎山と
山汎と因字をかへる也の多ゆ
と云潤のまこと山汎すもあゆ
ふもやもさへもす汎ニ乃
外くまかとも山乃字汎乃字

三句づき

さ山ハ ま山乃と山の字ア
付名も山の字ア

乃汎や大はのまくとれ
とれ水をうち

さく被石 乃生秋 と栗
二句きくぬなり

さくぬとよ あくまむけぬ
うくつゝア うくつゝア
付名六四とまかと姓白種
きくぬへあ

持乃字 ト月日培取ホ皆ニ
文よくぬとア 旦ニからけ
きくぬへあ

里のゆく ほ波の魚をうち
あもとたり非若

不非入端也端燒吸氣也
洞を加へぬるよりと人端
よ板龜一人端よナリムも
名前より端へまこといづく
の里の海士也

のく云
匂ひ名前よわく次るよも
若別方申よとく人來
らく露醉竹葉醉を
酒もく又盡みとば内
あくくのあくつひゆ
類不勝二子り詠よへひかよ
もと發よ讀うされども
醉狂わきえまされども
よと今一ありあー程ナニ
度酒乃ちへわらわらわも
うりせうりうあのまなも
ひ門と知る一清れと毫木
ス月ひ文系のめく一御
月を月君月あもねうち
もさうまとき月とすかく
晨明を八句端へまくれほ
き月面の月をももくすれ
あふも大象小もわくれほ
明よきく無き道理も
も兩月のま名されども
乃月次志月よ二句のから
極也くす

さしらふ御園の波流二句端
かじきすす文よのめあく
さしらふもく端も神のよも

やくまう日う醉うまくう物
えりまといもれ熱酒うつよ
ぬとさむうよ二句酒とふ為す
う立く向う着うの事う加へ
一國居ふのくふされと來
ふきあよより称文字す
付くめ代きぬを若々とさぬ
をめとよ二句酒とふを取下
同のまくふとまくにま
三者よ同眼空よ耳口よ
まのて舌くふまくよ
まじづくゆり推是よあく
乃端當もくを防みと皆
あくま車あく骨くま
あくらとゆくは陰象ると
ふもけくう例わう新武う
波活をなすうれも古人に味
せ手付茶とえけく酒うと
えよ視鏡家乃うりりめあ
里み月ようきくすのあくえ
ふもりわうゆも年ようさ
御子鼻のきくともうも
口乃きくともうも抑みのきくと
きくともうも抑みのきくと
え事もあまく日よえのま
耳小房のまどもしり不審
よかくみよかく風よ吹あく
のれも可付くと生ふ歎ひを
う處角一もけくとと案
よ月よう乃まも耳よ

乃字もぬとさへもぬと
居あらず人をいともか
毒氣をあめくらひやの
口あくまぬらひのまう
付くもくづくひをす
口とくもとくひをすのき
くのきくの耳あく
きぬのまうと耳
付くもくづくひをす
口あくまぬらひのまうの
字へ眼目は不可は付耳あく
きくのやうのまへ耳よ不
可付は際くくもかせ
あくのとくまぬようき
りあく目のとくまぬよう
不可は際くくあくのあくめ

ううおやううもも口のさ
しおもねをうる口よあ
まふされてもあると口よ
あをほりとくもくゆり
とくもくゆりとくもくゆり
とくもくゆりとくもくゆり
付くもくづくひをくじく
名あ乃口音割乃と音く
すの皆口音ふわく付く
音くもくづくひを耳
付くもくづくひを耳

穴も耳も

さえま ほきみとあとあと
乃教二の傳ふれ
内もあくあきとまくにま
りまも耳

蒙古文

卷之三

卷之三

きくは句百歌よ二十九
ありてとまくねよゆり
毛ひと人争うらひのびとよ
平よちを約ふもわ
りもやくへうめくぬてふを
への道と連よへそも連と連よ
二十九よどへよかわ

のまゝあくまくか
まあるも又のまふも二面と
うらまきのまよへ不爲邊色
も付わむわらぬ燒全其身
と爲御ゆきわらひそと其
中よ別くぬきあくまくち
くら年と云御したのまよ
りまた弱てあ
まゆくはとせきとも磨れ又
まの角はがくとあ御を
けらてよしりありゆた
じゆくとあくらんよ
と有りけしあきと
多きのまよしもとまのまよ
もみのまよしもくわくも
さうふこのまよしもあれとも
くは直れず

伊豆のまゝにあれ
身をもつてわざと
うれしむる事のあつた
わざへくらもひにけの如く
ておわづかさうすま
うれしむる事のあつた

うとお書の往よどむとも
おもきに移りおわせあま去
乃經ちひくへる有とくま
矣のをとへあくもとくまは
からきをあくもとくまは
くめりあめねるかよくの
あくと人道を極もうよ
ゆす極くほんじうんう
あめりとくまの申を
敵の机があくと御法と
御子とおもむらぬの道も
不知ひ道をくらへ自見あ
ね筆

さりとす
蝶の
えむら
林被下り生新く

さし鮎
あらわの皆類
残葉の宴
十月八日
く泊宿寓あり

矣

養
と漢よりへうくもの四な
あては運次は養一の外よ
きらくとくらふと林葉の名
と二名もあくわまと海か
蟻蟻とて三名もとくま
名の虫をとてあるときりく
次の虫名ふもこの用

きのと只一時りとくとけ
よひきのふーれをうそくせ
とス一あらぐ一あらぐとニ
あらぐとく日と教はもと不
育え自計も用

明日の種 まのうねはよ
せわを種みをまじめのうね

加し

穀 只一時りとくとけ
あひ穀乃ちよも穀端
打ると云はるいあらん段
乃ちよもと云はるい段
穀と云はるよとて
穀とも穀の事にあら

穀よ夜終二匁きくぬきぬ
の字よひ三匁きくぬきぬ
字よみちぬと云ひぬ
穀よひきぬの穀と云ひゆ
付ひる事と云ひゆさよひ
ときぬたくとトト所
乃宿と云ふと云ひ宿拵る
きぬこの字の石篇よ事
さかよひあ流よひ宿を行
てもくとくとくとくと
あると あらわすからあ
非多故相乃てよや
小書よらうもの字よひお
延を下す種うとくわゆと
を代う連よ夜終よ二匁

毛の支拂、曉起より向
あらりんくの衣裳と
里の物より削きの足を
もとよりあり、名を別の名
小室わらわと不思議もり
や夜祭よどみ祭り。こまめ
とおまつと夜祭よどみ祭
と右人の政治へおう移す
あれも拂よ式目を守り
夜祭よ不思議な去衣れ
の二物は、とあらんからめ
よハ斟酌えとくお然とさ
れ事へあくべくひ夜祭
まよハきぬと同字すれど
二物は、とくも運よつて
匂の相うちれども拂よハれ

さくのちう事とさくと
あよそみぬ移とあふう
ぬまくと一らあくと
剥きのまもあくとセ
白き魚と魚の剥きと
二あきと一あくとるき魚
くも剥の剥き用あむもの
ぬくの室と魚身も曉
度ぬむと魚身もくと
いふれを魚下りとすと
わふよとくへがう言ふと
わわくとあるのを放
うもれたのきぬくとあ
うちとぬきぬくとあ
花のきぬくとあくと
定めのゆきとあくと

五丁まきこみくへかのく
御まくまくわきの曉のえ
まむり苦衣のよよ花のあ
らとえ風のよよへぢくもる
とよまきいあまくふまのう
ひあふるまことものきゆく
とまき一とさもあとねむはそ
むのぬを連拂よ曉やかん
さくあむじらたかとへあふ
とりひくともゆあきね
川乃百首よあらんそれをミ
移りゆゑと合鳥あじし
一石ふよ一ほの拂一拂す
只乃巻二名流よ一度巻
一と写すりひりんとあもし
波うちたむかうの巻とモ

わづくすう乃巻ハニ森の
義されをあゆよあくす
春秋よニ交わるふよ難
むんをへぬふとすりゆり
朝晉のちき向よおじひ
くと附よくわと廻と附よ
よがのまくとも不善
本あり 稽^さまと去ゆ
人傳ゆり
本と本 二句もときとこと
ねよあくすへ二句もむりある
ま二句も

本紙まく あらうくも極
ねよあく

木の焼木 薪の事と書

薪よ木うりも二匁も

薪よ木うりも二匁も
薪よル帳 僻事しル帳

とちかくわふのまどく
あらゐむね絶ようんむる
とくえき乃致をくわく
筆意乃去くはすすきを
ゆふうくわふくわくをく
くくうけふのまの
心ちたれたり

木當 あのまニカム故祖

木當 木當

山類も木當也とあるへ

ゆく道へあ乃圓くわむけ
えくわくわくよ山類をのゆ
あくされも木當の山路も
といく木當山乃中ゆく
わくされも山類も化准乞
清心ち あゆこ清心乞

き一 きす一わをく

野鶴一 いのつる
清心ちのもの雜子の差
變鳥多處あはうかと云細
入をもとまへとひよ雜子
のうく前を守の金あ明よ
ゆくくこう代也も鶴を
ゆきともたれ鶴のうだを

卷之三

うきものどりと計つとも
雜事の事より雜三の内
をもれどもるるる
相連りさのとこそあつり
ぬ相ゆく一産よ二勺あつ懷
鳥をのぬとゆきとも
拂よへれりく用ふあらきの
相乃相一毛く精相とわを
うくえ一毛くひ外
きりはすえりうりう相少
相乃弟おの姫ふもあ
す精相乃弟おの姫ふもあ
とすと一毛くひ外
の相とお角す相つ不きり
の相とお角す相つ不きり

八二句考

小參きごん もとが家いえの候まつ 月つき
日ひなり東ひがし平ひら元げん年ねんににま
机き只ただ一ひと諦あきらめままつと計けいも
机きえの様よう野の狐きつね小こ机きの方ほう
机き又また野の狐きつね小こ机きの方ほう
机き又また野の狐きつね小こ机きの方ほう
机き又また野の狐きつね小こ机きの方ほう
机き又また野の狐きつね小こ机きの方ほう

此處不與他處同

君人情之惠之報勿忘大
恩大德也非人情一大恩

八十四

とてたるの事は、とまへり
ありともれどもあらへりたる
ともかくもあらへりたる
もあらへりたるが、ありたるよ
あらへりたるをすら
の主あるきをさへたらしくも
人情をわざをとも窓をも
あとを事あらへりとも人情を
わ漢よ王乃名人情よあ
すその人情よあらへり王、帝
王計し天下とそぞゑ
霸王の名ハ人情うち那
かももとえりとえりとえ
あらへりとえりとえり
家のむとえりとえりとえり

爲之極む高と云ひも又之極也よ
ニちこそ極くの事なりわく
まなづ

草連よ一か里と御よちニ
えぐへ一多角もじび因
多角の草どうらも角む者
もひうらあらりノ今名の萬地
萬地ももれ為の萬づき
刀の草ト一文字多角の名から
多角の名萬川あへ移れゆ
也よもやくアラシ去れどり
あ今一多角の名を継

海の波
波也修也
あはれよしや

勢乃難 浪也聲也居
ちを垣ふへ向面をさへぬ
務ると一ぬきくあらじし
鄉よへるちとありく勢の
ひまこと一せと三やうり
勢の者とあらのうてのうて
姫ねしゆうねふも姫勢の
うといく別よみえきとあ
ふみちあくは勢不あら
高木あきとゆふも後うる
只林の勢の事すこ

さわくもよ月次の月二方

生

ふと圓あつてまじ月次の
月と云ひむ月 三月 之音
きく云月の事と月日の
もやく事と云ふと月日
ひの月をもやうの月字
ふれとくもくもくとくとく
きとあたやうあくあらうら
ほえ字の處よ書あれども
又寔よあらうけ

さわくもよ衣ニカラキヌ

さえ字あくさりきひと
きとまよとく深き漬き
きのさえ字をかくもく
一うくおもひやうん

と云ひや乃羽拂ふへ一宿よニ
ありをふをくくとくとく

曲水宴 二月三日ふも

祇園寺 七月七日入り

乞巧真 七月七日入り

小野參 八月八日入り

さわ原の駒 俊徳の駒

まめくらり きも衣冠入り

月の小袖を附き
くりも事

題

夕暮 只一膳よハシる事と
夕陽 烏鷺とモ二匁の内より
夕暮 小れをすはぬ次第に度
夕暮 ちり夕暮と仰ひゆう
文字割されど二ものかしき
とも夕暮とクナリ高とて面を
て描し又夕暮と書の處の夕暮
字うれむる乃字まの字不
不確

夕暮と云ふ めやのと付く
チ越ふへあへ すれをぬと
二もと仰ひ事の内よ

ちりくらもりめあらとんを示
のれり

タア 運ふニ誰よりニあらるり
タとモりうわふ一箇
やまも一辺四角也誰よハせき
と發よ後もか後あくくえく
乃ねシタアハ運ふもタの事乃
裏よ阿もと能みハリとタアと
ハセキタとタとタと面をもとし
タアとタアとおわとタアとタ
アと合運よりとあり誰
よハ肩をわ数よ後くニ
三らわくへうく後ゆくも教合
タの事と面す角一發よ
後くも後ようくも教合
一症よハありとて教タヒテ
面を塗る由よタア声よも
せきの字ハ皆セキトナリ
タアタ字よも歌人承た
それうとも之歌乃く
大手もどきも歌乃く
歌もものもくもハニ句壁
タ金 反そ只一タ時ふよあ
す只氣の名されとタの
字ち乃字トハニ句壁
其の字よ二句壁と云ひヨロ
一但能よハリと書つ雲々
風ある今一句わをくく
あるこそ兩さタの字ハ内
よつりくタ前トヨモリふら
書ふ三句壁歌附よす歌と
夫海森由己源鴻山谷うけ
よあつとアミ神ケル丸り歌

筆の如きは、又字すりふ
字もれをウタのまゝの字によ
二句可憐なるうへ新式ア
をぬけうけたるものあ
三句でも書かれてゐるのあ
あ
わ
くとく悔悟の舞よハシムモ
欲道不ね物の人ハシトキ
文字がさうありておれながら
ちんかうとき、もう書かと清
流へりまますとどうも
郭云と文字をくみ詫
皮牡鷄皮不可非有と牛虎禽
多丸よと原由ゆむ強情
ゆめ

久遠の小
電雷不尋はれと新

卷之三

タチの如くあり
あとも字うとも

ノ
ノ
ノ
ノ

アラシホ
朝るとと経えと
多言ふありぬ妻

此の後も七月の
あともよしめに
おまめにまくまく
やまとまくまく
あ日々のくわ
秋よそくもあり

月新子と連よと二あま六那
ノヘウ体をノヘニモノヘト
モクシ入れるも皆ウタ附を
い能きもわざうゆ角

又月新 神のまひあみとも非
モトテ 神トテの月

久後ノヘ毛ハ入日の事より
されニク有神トれまくノテ
次角ノスヒ就地ナリヒ說
カ文多の不よくノミ
紀之

タケノ辰星ト云星の名うる
タネ川 肥後乃多々多々多々
とハ難ニ星小ハ西と平鷹月
と日小ハニカミ

タケノ山 名不よりあくノタ
アの陽山ナリ

タネ川 肥後乃多々多々多々
よ書のまよよ不適
堪勿御よと仰角

タネ川 えも書のまよふ不盡
キニ板よハニカミと
ありあやまつてお鍔ノトモ
付くももかくもかくすあタ
付くよはちもあちもさくとも
約時ノトモタヌのまハのあこ
タヌのまよニカミ但白体ト
トカミ角ノタヌのまハの秋
瓢箪ノトモタヌのまハの秋
瓢箪ノトモタヌのまハの秋
瓢箪ノトモタヌのまハの秋

ノハ鷺（アシカニシ）の左之（シズ）教圓（ケイエン）り瓢（ヒャウ）
簾（マツル）とニ爻（エキ）をわ瓢（ヒャウ）少（スカシ）く水
との三簾小食瓢（ヒャウ）をへあう
ね魚（ウニ）あんと云（ウニ）はすすめりく
ひきの瓢（ヒャウ）座（ザシテ）よ人（ヒト）の
竹（タケ）名復本（モリタケ）下（シタ）に云
付（タタキ）ちまゆれともかかで
玉魚（タマヒ）は魚（ヒ）くんの神（ジン）
うちく林（リム）よす所（シロ）を只（シテ）ハ
雜（ザラ）しゆく魚（ヒ）ひもとちやく
山三五（サンゴウ）タヌ魚（タヌヒ）乃翁（ノウ）ハ極
地（チ）より唐（カラ）不（ハ）じとるくても
ゑと矣（ヨリ）のよあれと物（モノ）
タヌ魚（タヌヒ）家（ヤマ）聞（スル）と云事（モノ）タヌの
ま乃（マナ）かこタの家（ヤマ）

よハニ匂（ヒガニ）の香（カニ）はニ而取
かこの財（カニ）が小もタ財（タヒ）が小も
きくも次肩（タクシ）の肩（カニ）人（ヒト）を
きくぬこ

ノハナ人（ヒト）爰（アタマ）あぬ（アヌ）より
タナリ者（ヒト）このアタマをす乃（ナニ）此
家（ヤマ）姓（セイ）姓（セイ）の姓（セイ）此
おもくへあ代情（タメシ）うら人（ヒト）第
あへく汝（タマニ）

物（モノ）此（シ）鳥（トリ）御役（ミツバチ）よあひえ
鶴（ハク）乃事（ナシ）と冥冥（ミミシギ）のあふもよあ
里（シテ）

せんと致よらんも少く
匂ミシヘ新式よりあらま
穿刺鑿ミサヨト中はとあ世と
近く不因ふくじつつき
るをやもみにうよ拂うりも
此理を察よ去付ゆらみせ
相のをもとへれりも波のを
頭のをもとへれりも波のを
外へきねち新式よも似物
乃もハ若別のするりと
海こののをよ逃うへせりま
角すり取よ取立を而を
あゆこ納涼し

富士のを連よ近年きの
おののとく清をまと一物
鳥とを名ふとあへと代の

家通万葉のあとわゆ
れあ不わ侍かよ万葉集と
あめ次先ををあめくふ
あきゆくさあこ離よも方
葉のあと用く富士のを
ち難から清も物をも等
えよもむだり富士の様よ
ゆりげじも六月の金の
日すゑくそくれゆるりと
やうよハ今しへ人共に
お邊よりまたと外のあと角
ひ道のをもくらへてよ
乃はも富士の極へぬされ
ともありへ煙乃もくやうよ
もじと古今の序よゆくすや
世間工事政治の批判す

古事記続篇小セリ事多
御と連洲より方葉の事と
不寄事あるへまや家祇家
長所よハ審士の事と難よ
せし物とと代赤人の事と
乃浦の事とれ古今之を乃
郡よへみ生と定あめく瀬
の町方葉の事と不被前
と難言とくをよあくあ
定とくもむきむき機の事
を不知か歎あらむうてそ
と人をもひとよモアと音
てあくの御とそのを業
平のよめ事とほ勢物終
見るや一夕よくひくと
ニ象石を死人とひく
よめ防衛トキキアリセ
殊勝されくとく御古今之
衰傷の御ふへらひ集と
連歌の吉鳩乃達とくと
ひとも衰傷のあたる無
の御よへと移し事のあり
あくとくとくとんやあたるの
習い詠集トハゆる事と
ゆりゆり御古今之の御りと
えくの事ゆうすくとく
とくとく方葉のらきの日あ
あくの事ゆうすくとく
とくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとく

おからあえじかよお明
みきをほりあくまくらも
ふ角／恩葉のゑとこ
ろくのゑ

おふゆよそれ連ふ
ゆをきくぬ拂う
せらちこちよるるもと代
ふ角とや拂はせき拂はる
ふかく拂はれくゆもく
着もれもとちくあ
きて續ゆことくら小鳥
と喜鶴のえくまくひり
やの事よや万葉下り
あ鳩とちく鶴とよめり
ちくへ鳩よ鳩とてはま

ゆよや万葉書りも
種くのゆめわまとくえまと
乃く一遍よる理をきし
魚

書れどゆうねし極極よみ
すすむじ不者む、
くのむ乃えお皆えを
内より

書間右のへともの縁つ
縁ふち清きもと書
のむのむの草木の下
え人あまえもく／書乃若
ぬとくも書の紙も草
ともも書きのあと向
あけも書きそも書け
ありとくとも書

ても消えきのよ宣うされ
そや下もけも皆まことの
からむのひよとむ乃清
事とも多よあきを告ま
り宣すらとへるふらう
所と

雪乃山ニタアリ一よハ事と
ありゆくせりも
山ナリ雪まろきの野こゑ
波相しそと非山數二下ト
天竺の雪山と名付ふよりと
やスニテもも非山數波
相よハ峰々々々ふも取ら
げくまつて雪の山とわをく
あらゆらわく

急、小幼ニテも寝寝とめ
因のまじるくとも有
ナリ連よハ七夕を拂よハ
メウ雪へ一夏朝拂ふるや
ツノモうつの雪を拂へ
あらわく

夏とそりあるハ大有急ト
夏と成し候の種しま極也
夏ち急トモソリトモ有
ノモアシテひまねの夏
と云ひ夏のとくも此處
は車や裳と仰はあると同
一事し夏物よつまつ次
年月日附れよりとたゞ
あま夏もとくもとまの物も
ゆくとま事とまの物も

夏秋の弊の差々と云ふ事
との最ももあらこ匂絲よ
トかの差中間を夏秋
も弊うこよもあらにあ
す夏の字よハスをも
夏の世 河舟よりあ
せめく 美よニもあら
せめく わく

らふ失 引張月 年れ失
ふひ数 わく 次
は可もれと新式因のれ紙
をましのれのれよわせら
うと失よぢ紙きへと
失事こあくの小もひら張
月と云ふ年の失とえくへ

失紙をきくとねよへあ
わをさくとえくもくれ
ものうる年年の失も二
年の失よあくのうむち
うちわをきくぬとえくの
うと年の失との事くら
離よへう張月と年の失と
くらりときくぬをもくら
あうのまへあくのうと
月のちと連よニあまと離
よへきくと發よ便を今
きくよことのれとす

ゆ あと
やくもよわの字末の字
と二句ゆくつ

車へ向むとまくゆく
もしもともへ身の極くゑ
世の極くゑよとの足くゑ
わらふゆゑをすり道もく
ゆゑもれきゑゑの極
くゑよとへ向むのえまよ
あくまかゆへひのままの
まよとへゆ

ゆふゆふゆきうら
ニちきくまハ唯来
唯還とりのまう

かうりとづく

り未り未ニ度あらし
郷よへゆゑを
リ未ニ度あらしゆゑ
アシカヒトヘ連は因ゆゑを

と郷よへゆりあり
とれをゆりあり



